

2



0010117000

0010117-000

特247-538

在支皇国民に寄す

大原洋三・著

国民政治経済研究所出版部

昭和18

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特247

538

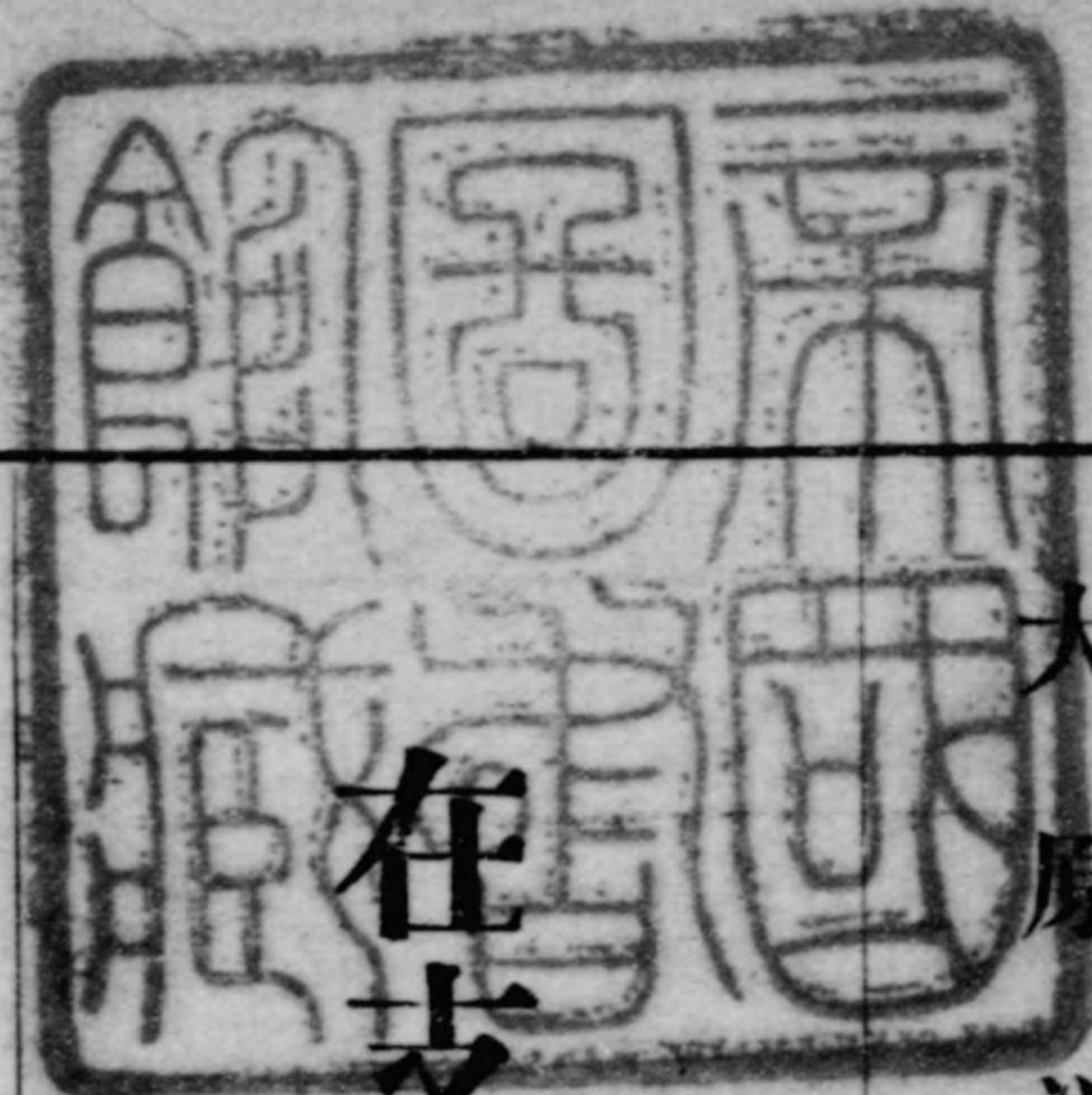
大原洋三著

在支皇国民に寄す

国民政治経済研究所

45

特297
538

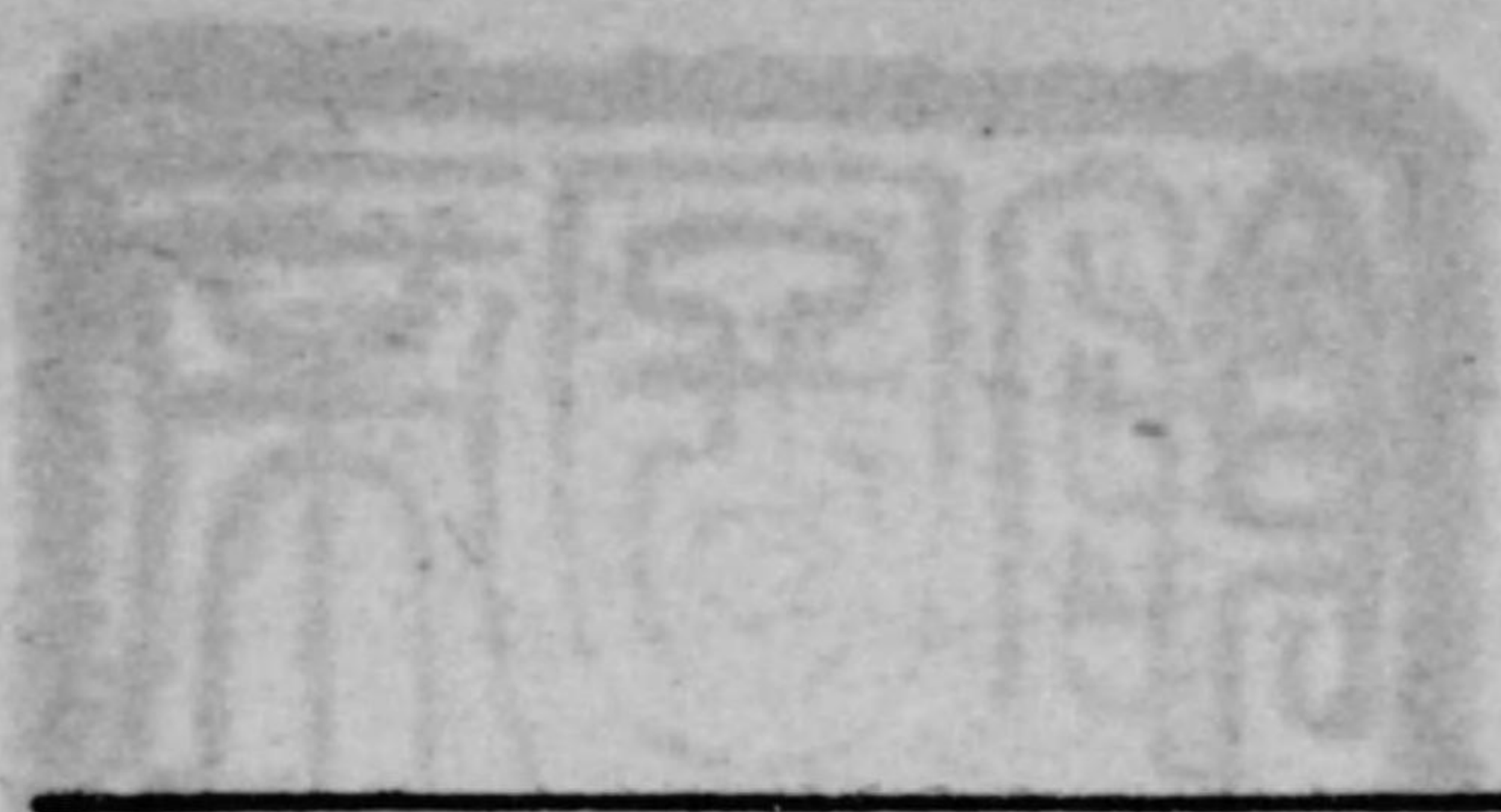


大原洋三著

在支皇國民に寄す

國民政治經濟研究所





目 次

大東亞戰爭と支那問題……………	(3)
支那問題解決への大道……………	(9)
在支皇國民の重大責務……………	(15)
反省と飛躍の時機……………	(24)



大東亞戰爭と支那問題

我國は今日有史以來未曾有の重大局面に直面してゐる。大東亞戰爭を完遂するか否かは、眞に國家興敗のみならず東亞存亡の岐れる所であり、對米英の決戦に全國力を賭する所以は此處にある。

我が皇軍の勇武は敵と雖も驚嘆をかざる所であつて、開戦以來、戦つて勝たざるなく、攻めて取らざるはない。まさに古今東西を壓する赫々たる戦果である。緒戦劈頭ハワイに米太平洋艦隊を屠り、マレー沖に英新編極東艦隊の主力を沈め、引續いて香港を取り、シンガポールを陥れ、瞬く間に蘭領印度緬甸を席捲した。この武力的強さに對しては、我々は全幅的信賴を持ち、日本に生れた誇を新にするものであるが、大東亞戰爭は單なる武力戦で完遂されるものではない。

現代戦は總力戦である。すべての國民がこれに参加し、すべての國力要素が動員されねばならぬ總力戦である。もとより武力は必然的に戦争の中核要素である。しかし武力にも劣らぬ眞劍さを以て、政治的、經濟的、思想的戦力が動員されなくてはならない。大東亞戦争は正に斯の如き總力戦として把握さるべきであつて、勇武なる皇軍の前線に於ける活動と併行して、政治、經濟、思想等國家のあらゆる部面が等しく戦争の完遂に向つて活動しなくてはならないのである。

然らば斯の如き總力戦としての大東亞戦争を最後の勝利に完結すべき具體的方途如何。大東亞共榮圏の建設を以て、敵の政治力、經濟力及思想戦に對抗すること之であり、これ以外には決してないのである。亞細亞十億の人口を我々と俱にあらしめ、東亞の道義を昂揚すること、これ政治力思想力による戦ひであり、亞細亞の持つ資源と生産力とを我々と俱にあらしめ之を動員すること、これ經濟力による戦ひである。大東亞共榮圏の諸邦諸民族は大東亞戦争が東亞存亡の岐るる所であることを深く認識し今や大東亞の總力戦態勢が

着々として完整されつゝある。實に共榮圏建設は戦争の目的であると同時に、戦争遂行のために缺くべからざる行程である。

さて、大東亞共榮圏の建設が大東亞諸邦諸民族に負荷された戦争完遂のために缺くべからざる行程であるとするならば、この路線に沿ふ支那問題の解決が必要となる。所謂支那問題の解決とは重慶の壊滅のみならず、更に積極的に日支友好關係の恒久的樹立に焦點を置いた日支關係の處理である。何となれば、支那の更生、日支の協力は、東亞共榮圏の中核問題だからである。

東亞には多くの民族がある。しかし、その數に於て、その能力に於て、最も重要なるものは我國を除いては先づ支那であり漢民族である。これを度外視して東亞共榮圏を考へることは出来ない。支那が東洋道徳に目醒め、一億の日本國民と四億の支那國民とが協力し提携することによつて、新しき東亞の中核は形成されるのである。日支の協力提携、すなはち日支恒久の友好を目指す支那問題の解決こそ東亞共榮圏の基礎である。

大東亞戰爭の發生に先立つて、我が國民の一部に行はれてゐた誤算は、對英戰を開始すれば支那事變の如きは直ちに解決されるであらうといふことであつた。これはたしかに樂觀に過ぎた見透しであつた。重慶側の頑迷さは一層深く一層根強いのである。彼等は皇軍がいたる所で米英の所謂不沈艦隊を打破し、マレー、比島、蘭印、緬甸等々を悉く掌握してしまつた現在なほ米英側の最後の勝利を信じ、無益の抗戰を繼續してゐる。對米英戰が直接に支那事變を解決するものと考へて拱手支那事變を傍觀して居つては、重慶は撃滅されないと同時に支那四億の民心の把握日支の協力提携は齎されない。我々は重慶を撃滅する爲の努力と共に銃後のものとしては更に凡有努力を傾注して日支の提携協力を促進することが第一の目標でなければならぬ。これによつて支那問題を解決の軌道に乗せ、新しき東亞の政治的、經濟的思想的建設を遂行しつゝ、そこから發生する東亞の大きな政治力、經濟力、道義力を以て終局的に米英を屈伏せしめるのである。即ち一面建設、一面戰鬥である。

英國の支那に對する政治經濟的攻略が、極めて露骨に阿片戰爭から始つてゐることは人の知る通りであるが、米國の支那を基地とする東亞への、特に日本への政治的、思想的攻撃もまた既に古く開始されてゐた。米國は支那の文化施設、文化事業に異常な努力を傾注した。各地大學の建設以下支那主要都市に於ける文化教育機關の大半は、米國の基金により、米國人の手で經營され、この米國の努力によつて米國が得たものは、支那に於ける滔々たるアメリカニズムであり、支那青年層の自己を忘却せる親米的崇米的傾向であつた。かうして米國の對支政治的、思想的攻撃は成功したのである。この英米による支那への侵略の結果は支那をして米英陣營に投ぜしめることとなり、米英を背景とした誤れる支那の對日政策の矯正手段として支那事變が戦はれたのは避け難い必然の成行であつた。

が支那事變の窺局の目標は膺懲、征服にあるのではなくして、米英によつて政治的、經濟的、思想的に奪はれた支那を再び東亞のものに奪ひ返すことにならねばならぬ。そのため我國は先づ武力を用ゐた。武力によつて支那の抗日勢力を叩いた。しかし、武力に續

いて必要なことは、政治的、經濟的、道義的に支那をその本然の姿に建て直すことではなければならぬ。更生支那を支援することではなければならぬ。そして米英的束縛から脱した更生支那と我國との協力提携を以て新しき東亞の中核體を結成し米英の世界征覇の非望に對し最後の終止符を打つことでなければならぬ。之が即ち支那問題の解決である。對米英戰の進展によつて、支那事變が自然に解決されるといふ如き本末を轉倒した樂觀論は、今や清算されなくてはならない。支那問題の解決、東亞の協力によつて米英を撃滅すべき政治力、經濟力、道義力を結成すること、これが目前の急務である。それは日本の急務であり支那の急務であり、東亞の急務である。

總力戰たる大東亞戰爭の本質を見究めず、前線に於ける武力にのみ依頼して、目前の急務たる東亞の政治的、經濟的建設を忽せにする如きは誤謬の甚しきものである。我々は前線の武力に信頼すると共に日支友好關係の確立新東亞の建設に向つて、武力戰に併行する政治戰、經濟戰及思想戰をあくまで果敢に戦ひぬかねばならないのである。

支那問題解決への大道

支那問題の解決——日支の協力提携が總力戰たる大東亞戰爭に於ける日支兩國民の責務であるならば、我々はこのためにあらゆる手段を盡し、あらゆる努力を傾注せねばならぬ。こゝに於て、日支兩國民間の協力提携の具體的方途如何といふことが問題となるのである。

これについて論ずべきことは極めて廣汎多岐に亘るであらうが、要約すれば、何よりも先づ日支兩國民の精神的結合を實現することである。

支那事變といふ、兄弟相争ふ悲劇を齎したものは、日支兩國民の精神的離反であつた。我々は將來に於ける日支の正しき結合を實現するために、今日までの兩者の精神的離反の事實について知る必要がある。

元來日支兩國民が本質的に對立すべきものでないことは何人の目にも明らかである。兩者は本質的に協同し提携すべきものであつた。第一に兩者は精神的な亞細亞文化の所有者である。人種的優越感を以て亞細亞に臨み物質文明を以て亞細亞を征服せんとした米英に對して、日支兩國民族が協同すべきことは理の當然である。第二に兩者は地理的に近接してゐる。廣域經濟圏の確立によつてのみ自主的存立を全うし得る現代世界の政治的動向に於て、地理的に近接する日支が協同することは、各々の獨立自存のために必要である。第三に、歴史的な兩者の交流關係がある。かつて支那の儒佛文化は日本を啓發した。日本の明治維新は大いに支那を啓發し覺醒せしめた。明治維新によつて國力の飛躍的發展を遂げ獨力克く強露を屈した日本が、清末の頹廢にあつた支那に對して如何に大きな影響を與へたか。日本に學んだ支那留學生の悉くが、進歩的革命的の中堅分子として、國民革命の推進者となつたのであつた。これらの歴史的事實はすべて兩者の淺からぬ因縁を物語るものといはねばならない。

この本質的に對立すべき理由のない兩國民が、如何にして支那事變なる悲劇を醸すまでに深刻なる對立に陥込んだか。我々はこれについて大約二つの理由を發見することが出来るであらう。その一つは日支の協同を不利益とする亞細亞侵略者達の意識的日支離間策である。米英が亞細亞を侵略し亞細亞を支配するためには、亞細亞に自主的な統一をもたらしめないことが必要であつた。彼等は維新日本の飛躍的發展に恐怖を感じた。そしてまた「眠れる獅子」の覺醒を恐れた。彼等は亞細亞に對する支配の確立と維持のために最も有効な方法として、執拗なる日支離間政策すなはち思想的、政治的攻撃手段をとつた。支那革命の初期に於ける日支の結合が次第に破れて、遂に血で血を洗ふ對立にまで及んだ原因の一半は、彼等の巧妙を極めた東亞政策によるものである。

米英の日支離間政策はもとより憎むべきものである。しかし、その謀略にうまうまと乘せられた日支兩國民の無反省無自覺も亦大いに責めらるべきであらう。此處に悲劇の第二の原因がある。實に、明治維新の大業に依つて支那を教へ導いた日本は、清末革命によつ

て起上つた新しき支那の生長に對して、時に正當なる理解を缺き、支那民衆の反感が米英の煽動に拍車される余地があつたこと否難い事實である。若し日本國民が明治大業の精神を失ふことなく、日露戦争の大義を忘却することなしに、亞細亞の先覺者たる大自覺を以て絶えず支那國民に臨んだのであつたならば、以後の不幸なる日支對立は避け得たに相違ない。が、無自覺の非はもとより支那國民にもある。國民革命が維新の日本に教へられ鼓舞されて起つたものであるにも拘らず、支那は日本に對する輕侮の念を捨てなかつた。自ら大國であるとし、かつて日本を教へた先進國であると自負した。この不當なる自負と對日輕侮こそ狂盲的排日運動の素地である。殊に國民政府によつて一應の政治的統一が成つて後は、今や實力的に日本に對抗し得るであらうといつた驚くべき錯覺に陥り、そしてまた亞細亞民族としての自覺を忘れて、米英の物質力に叩頭して隣邦日本を事毎に侮辱した。米英の威力の前に日本は頭が上らないのだと信じ込んだ。この對日輕侮を素地とし、米英の離間政策に踊らされた排日運動が、つひに支那事變の不幸を惹起したのである。

尤も日支兩國が相互に理解せず、その立場について充分なる自覺を持ち得なかつたことは、一面に於て止むを得ざる成行でもあつた。維新後の日本と革命過程の支那とは、共に歐米思想と物質文明とを攝取せんがために多忙を極めた。それは單的に歐米文化吸收時代であつた。この時期に於ては日支國民が歐米を先進國と考へその紛亂たる物質文明に執着して自らの立場と善さを忘れ、隣邦を輕視したのは無理からぬ事でもあつた。兩者共にその目を歐米に奮はれつつあつたがために、鄰邦について理解する余裕がなかつたのである。そして兩者が熱情的歐米追隨から覺醒して、その精神的自立を回復したとき、相互の間には既に埋め切れぬ深い溝が穿たれてゐたのである。まことに日支兩國の離反は、物質文明の暴風がものした避け難い被害であり一つの行程でもあつた。

しかしながら今や兩者は強き自省によつて相互に相知るべき機會に到達した。相互に戰ふといふことは反面相互に知ることである。支那事變といふ不幸なる事態は、その反面に日支が夫々に自省し夫々に自己を發見し又相互に他を相知るべき好個の機會を提供した。

日本國民は事變を通じて支那を知らされ、支那國民亦同じく日本を知らねばならなかつたのである。即ち支那事變以來の教訓として、新しき支那の建設が根強いものであることが了解された。そして又事變前に於ける如き支那の對日輕侮心の間違であることも了解された。日本の實力はかつて支那國民がその誤れる自負心から算當したものは全く異つてゐた。日本は支那の誇るその近代的軍隊を一舉にして壓倒したのみならず、事變五年の後なほ敢然として米英に宣戰し、その勢力を全東亞から掃蕩したのである。しかしてこの米英勢力の存在と策動が日支間の障害であつたことも、今や日支兩國國民によつて理解されたのである。日支兩國國民が互に相知ることとなつたのは事變と大東亞戰爭の齎した大きな收穫である。今や兩者は過去の無理解を清算して互に提携すべき精神的契機を得たのである。これを更に深め更に擴充して、轉禍爲福の道を講ずべきである。勿論支那抗日勢力は引續いて抗戰するであらうが斯の如きは一つの隨性に過ぎない。抗日政策によつて立つ重慶政權が如何にその政權維持のために狂奔するとしても、事變の最大原因たるものは今や取除

かれつつある。日支の精神的結合の道は開かれたのである。

日本の實力、日本の眞意を理解した支那の先驅的なる人々は、既に重慶を離脱して南京政府を組織し、全面的に我國と協力し、今や米英に對する宣戰によつて日支は戰友となつたのである。その成果の如何は一に今後の努力に係るとはいへ、之は既に日支問題解決の素地が耕されたことの大切なる證左である。我々は東亞戰爭の終局的勝利の前提なる新東亞圏の建設をめざして、その實質的中核をなすべき日支兩國國民の協同のために全力をつくすべきである。これが支那問題解決の道であり銃後に於て我々皇國民の果すべき當面最大の任務である。

在支皇國民の重大責務

以上我々は支那問題の解決、即ち日支協力提携の實現が東亞諸邦諸民族の存亡をかけた

大東亞戰爭の完遂に不可缺なる政治的經濟的義務であることを説いた。そして支那問題の解決は、日支兩國民が過去に於ける無自覺と相互の無理解について反省し、以て兩者の精神的結合を實現するにあることを主張した。これらの主張にして誤りでないならば、在支日本國民の今日の義務たるや極めて重大なりといふべきであらう。すなはち在支日本國民は前線の武力戦に相應じて、日支協力提携の實現、東亞共榮圈建設の政治的、道義的、經濟的の建設戦の挺身部隊たる義務を負ふのである。日支兩國民の精神的結合は先づ在支日本國民の實踐的努力に俟たねばならない。日常支那國民に接觸しつつある在支日本國民こそ日支を結ぶ現實的紐帶であり、その心構如何、行動如何は、直ちに日支結合の將來に大なる影響を與へずにはゐないのである。今日支那にあるすべての日本國民は、斯くの如きその重大義務を確認し、選ばれたる戦士として自らを律するに嚴格なるべきである。

勿論、平面的關係に於て支那を知り支那に結ぶと同時に、支那國民に對する道義的指導義務をも忘れてはならない。

我國は新しき東亞の指導者である。否必然に指導者たらざるを得ないのである。米英の思想的物質的搾取の鐵鎖から解放された亞細亞十億の民衆が、夫々の屬する自主獨立國家の自由なる民として處を得るためには、これらの國家があらゆる米英の把握、殊に思想的把握から自から離脱し、それらの民衆が自主的に米英の思想侵略に對抗し得るまでに、これを支援指導しなければならぬ。そして先づ最大の友邦たる支那國家が、眞實の獨立能力を具へその道義感に於て、その國家觀に於て、從つて又その世界觀に於て、東洋思想に覺醒することが必要である。東亞解放の聖戦に干戈をとつた我國は當然の結果として、この指導的任務を負ふのである。

國家がこの指導的任務を負ひつつある以上、個々の國民はまた東亞の諸民族大衆に對して、各々が一個の指導者として立たねばならない。我々はあくまで正しき指導者として、支那が新情勢下に於ける獨立國家の本質を認識し眞實の意味に於て獨立國家としての能力を持ち得るやうに、實踐垂範、支那國民に臨む必要がある。端的に云へば、支那が獨立を

完成し眞に帝國の盟邦となることが、とりもなほさず新東亞の中核を結成することであり、總力戦を戦ひぬくべき政治力、經濟力を確立することであり、大東亞の存立自主を確立することである。

支那國民はかつて盤上の砂といはれた。國民的結束を持たないバラ／＼の民衆であつた。如何なる君主も官僚的政權も、これに國家的結束と統一を與へることが出来なかつたのである。革命以後に於ける國民黨の努力は、この盤上の砂を集めてとも角も一應の國家的統一を形づくることが出来たが、英米思想と物質文明の擒となり、方向を誤つたが故に業半ばにして支那事變となり、再び統一を失つた。今や汪精衛主席の下に再び統一の方向に向つて居るが、その新國民運動は未だ端緒にいたばかりである。が、支那には今も民族的獨立のために缺くことの出来ない滅私奉公がない。支那の最大の弱點はそこにある。個人としての支那人が、個人としての日本人に較べて、その能力に於て劣つてゐるといふことは出来ない。たゞ私利私慾がとかく先になり、國家的要請に對する努力が後になり、

善隣との友好が疎かになるが故に素質に於てすぐれ、數に於て多いに拘らず、支那は國家として共榮圈の建設、恒久的國際平和のためにその實力を充分に發揮することが出来ないのである。この支那國民をしてその愛國心愛東亞心に覺醒せしめ、これに眞實の國家的結束と國家的使命とを與へることこそ支那に對する曇りなき支援の要點であるといへよう。

この點に於て我國は支那に對し百歩の長を有する。日本國民はその世界に比類なき國家意識と結束とを持つてゐる。そしてそれ故にのみかつて東亞諸民族の何れもがなし得なかつた發展を成就した。國家のためならば、大東亞の共榮と平和の爲ならば、國民の一人一人が私利私慾を捨てる。つまり、より大きな目的、より大きな存在の爲に個人を奉仕し、國家を奉仕するのである。大東亞戦争に於て東亞の存亡の爲に國家の爲に國家の總力を擧げ、國運を賭して居るのである。これは國家意識不足にして、また充分に國家的結束なく國家的使命を自覺せざる支那の遠く及ばない所である。我國が支那を指導してこれに賦與すべきものはこの認識この結束この使命の自覺である。日支の關係は過去に於て蝸

牛角上の争であつたと言へる。しかもその原因がお互の無理解と英米の策動にあつたとすれば、又既にこれ等の原因が除去されたとすれば、日支兩國はお互の獨立を保持しお互に國力の充實を計り、その基礎の上に新たなる共通の大目標すなはち大東亞の保衛と共榮の爲に協力提携する時期が來たのである。在支日本國民はこの大東亞建設の原理の下に懇切周到なる反省と努力を以て支那を知り支那に結ぶべし、而して堂々先進者の自信を以て支那國民を導くべきである。そこに事變を契機とする新しき日支提携の道は開け、新東亞の中核としての日支兩大國の協同は實現するであらう。

我々は在支日本國民のあり方について、以上の如く信ずる。そして今日までの在支國民の實狀を検討して、そこに多くの改むべきもの、正すべきもの、存することをみるのである。我々はこゝに卒直に在支國民の多數に向つて再思三省を求めなければならぬ。

その認識に於て、その心構へに於て、その行動に於て、在支國民は果して正しく總力戦下の選ばれたる戦士たるに適はしくあつたであらうか。

第一に大東亞戦争と支那事變との關聯に對する認識の問題である。多くの人は支那事變を以て單なる派生的事件の如く考へ、對米英戦の開始された現在、米英に對する武力戦の進展に従つて、おのづから解決さるべきものであるかに見て居る。大東亞戦争が東亞解放の聖戦であることに付ては五月繩い程に新聞雜誌に書かれたが、東亞解放の聖戦であるならばこれを完遂する爲には日支の協同を實現し、これを東亞共榮國樹立の中核とするところが日支兩國國民の責務である、といふ當然の論理について充分なる認識をもたなかつたのではあるまいか。支那抗日勢力は純然たる米英勢力の傀儡であり、米英さへ打倒すれば難なく片がつくのだといつた安易なる俗論、一面論に安んじてゐた傾向はなかつたであらうか。東亞解放戦に於ける支那事變の重要性を把握せず、従つてまた總力戦としての米英打倒戦の酷烈なる様相下に於て日支兩國國民の積極的協力提携の促進の必要性と責務とに關して深く認識する所がなかつたのではあるまいか。

第二に建設第一線に立つ指導者としての心構への問題である。東亞解放戦に於ける支那

事變の重要性に對する認識の誤りは、當然その心構への誤りを結果する。我々は特に上海に於ける居留民の間に、最近帝國の施策、措置に對する不平不満が云々されつゝあることを見る。もとより急激なる轉變の際に於て、官の施策また必ずしも萬全なるを期し難いであらう。従つてこれに對する批判の生ずることも已むを得ないであらうし、むしろ、大所高所よりする正當の批判は歓迎すべきである。さへいへよう。しかしながら大局的見地を外れた得手勝手なる非難も少くないのである。すなはち舊來の上海の國際的性格、經濟都市としての自由主義的性格に執着し、新情勢下に於ける當然なる變貌に抵抗しようとする守舊的態度が往々にして見られるのである。又治外法權の撤廢に關して徒らに支那官吏の苛斂誅求、支那警察の腐敗、支那法律及刑務所の不備等が論議されつゝある。支那側の反省改善を求める爲にはこれらの論議も意味なしとしないのであるが、それと同時に自ら律するに嚴なるものがある以上之に對し苛斂誅求も出來まいし支那警察や刑務所に當然に厄介になることを前提としたやうな反對論の必要はないであらう。日支協力、日支提携の本質

が眞に認識されるならば、上海居留民の間にこれらの安價な目先だけの論議はない筈であるに拘らず不平不満を聞くといふことは、明らかに在支國民の心構への誤りを示すものといはねばなるまい。

第三にその行動である。過般來上海に於ては、重要物資の買占め、その他投機的行爲の少くないことが指摘されてゐる。さうした投機的行爲は、おそらくユダヤ人若しくは敵性的第三國人の外は私利私慾に走る支那人のなす所であるに相違ないのであり、幸にして邦人にして舊來の營利主義的惰性からユダヤ的投機行爲に出たものありとは承知しないのであるが、かういふ事態が行はれるに至つたことに付て在支居留民の責任はなかつたであらうか。日本國民の心の間隙、行動の非妥當性に幾分の責任があつたのではあるまいか。在支國民が日支結合の前衛的任務に副うて、又よき指導者であるならば在支國民の正しき意志の發動として、これらの間違つた投機者流に無言の批難を與へ、無言の反省を餘儀なくせしめ得る精神力がある筈である。いちいち具體的例示を試みるまでもない。却つて日支

の精神的結合を破壊する如き行動の見られるのは何としたことであらう。すべての日本國民は、支那國民に對して心底から協和すべき友であり、同時に尊敬すべき指導者でなければならぬ。にも拘らず、往々にして親しみ難い出稼人であり、敬遠すべき壓制者であつたとはいへないであらうか。これら行動に於ける錯誤は、いふまでもなく戦争の事態に對する認識と心構への不充分に基くものである。

反省と飛躍の時機

今や大東亞戦争の進展は、日と共にその總力戦たる所以、長期国力戦たる様相を明らかにしつつある。

戦果に酔うてはならぬといはれる。正にその通りである。緒戦に於ける赫々たる戦果はいふまでもなく皇軍の比類なき忠誠勇武を示すものであり、我が國體の精華を表現するも

のとして世界史上にその光輝を誇るべきである。しかしながら、この緒戦の勝利に驕つて長期に亘る政治的、經濟的建設の必要を忘却するならば、それは今次戦争の現代戰的性質を算へざるものであり、戦争の終局的勝利への道を阻害するものである。我々は個々の戦局に對して一喜一憂する必要はない。戦争が如何なる長期に及ぼうとも斷じてゆるがぬ必勝の信念を把持して、じつくりとこの一面戦闘一面建設の總力戦を戦ひぬかねばならない。その意味に於て我々はこゝに日支の協力提携の重要意義と在支日本國民の重大責務について強調した。これらのことは或はいまさらいふまでもない自明の理であつたかも知れない。たゞ今日までの在支國民の状態に於て、必ずしもこれを自明のこととして緘黙するを得ないものあつたが故に、あらためてこゝに思ふ所を披瀝したのである。すなはち在支國民がその認識、心構へ、行動に於て、改むべき所の少からぬことは前述の如くである。今日こそ深刻なる反省と一大飛躍の時機である。

もとより革新を要するものは支那側にも多々ある。又日本側としては民間の側にのみ存

するわけではない。官の側にも多くの改むべきものはあつた。就中従來の官僚的制度に於て事務澁滞の因をなしつゝあつた各省、各廳のセクシヨナリズムの如き、切實に清算を要請せられ來つた所のものである。我々は民間の側の反省を求めると同時に、爲政側の自己批判をも痛切に要求しなければならぬ。然るに幸ひにして官邊のセクシヨナリズムは、最近の中共政府の方針に基いておそまきながら克服せられつゝあるものゝ如くである。行政簡素化といひ大東亞省の設置による外地行政の一元化といひ、舊來の官僚的割據主義は漸次打破せられつゝあるのである。特に支那に於ける行政事務のすべてが大東亞省の管掌に一元化しつゝあることは注目すべきである。おそらく事態の進行と共にこの傾向は益々拍車せられるであらうこと疑を容れない。また民間は徒らなる批判を以て官を攻撃することを止め、行政革新の正しき方向にむかつてこれを激勵鞭撻すべきであらう。官民一體の反省と飛躍こそ今や當面の急務である。

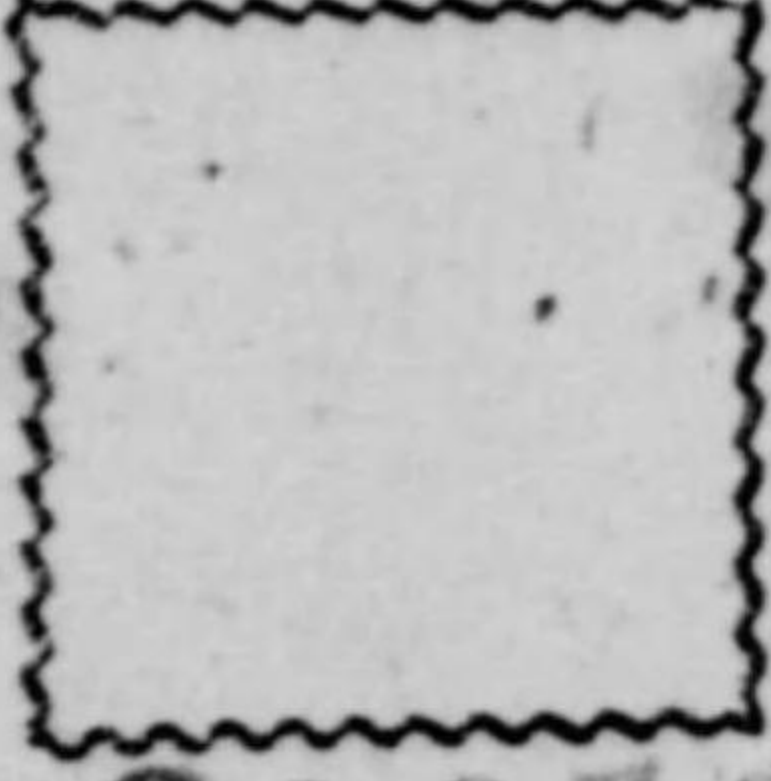
すべての在支國民は先づ大東亞戦争下に於ける支那事變の重大意義に就て確認すべし。

武力的に米英を撃破することによつて事變が解決され、日支の協同が實現され、東亞共榮圏の理想が達成されるといつた、安易なる一面論を克服して、日支の提携によつて大東亞戦争を勝ちぬくべき政治的、經濟的戦力が擴充され得る所以を認識すべし。

次いで、在支國民こそが日支兩國民をつなぐ現實的紐帶なることを認め、その重大責務に相應する堅確不動の心構へを確立すべし。舊來の移民的、出稼人的精神を一切拂拭し、總力戦、建設戦の第一線部隊たる心的態勢を打成すべし。苟くも自由主義的、功利主義的欲求から行政當局の施策の強化を批判する如き誤謬を警しめ、進んで當局の戰時的施策に協力しつゝ、ともすれば英米的唯物主義に流れんとする支那國民に對して、道義的指導者たるの精神を把握すべし。

更に、その日常の實踐行動に於て最も嚴格に建設戦々士たるの實を發揚すべし。統制違反、經濟攪亂の如き利敵行動の指彈せらるべきことはいふまでもないとして、あくまで支那國民の師表たるべく、正々堂々の行動を以てこれに臨むべし。

432
290



30917
(出文協承認ア 號)

昭和十八年三月二十日印刷
昭和十八年三月二十六日初版

「在支皇國民に寄す」

定價金十五錢

著者 大原洋三

發行者 山田正夫

印刷者 株式會社文成社

前田宗松

東京市神田區錦町二丁目五番地

東京市四谷區新宿一丁目二四番地

發行所 國民政治經濟研究所出版部

電話四谷(35)五八〇四番

振替東京一五〇一六四番

文協會員番號一一〇一八七番

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

非常時局下、在支國民に對するこれらの要求が過大なりとは決していひ得ないであらう。むしろこれは最少限の要求であるに過ぎない。我々は内外狀勢の加速的的重大化に照し、在支皇國民の一人として以上の如く信じ、俱に相携へて邁進せんことを期するものである。

